

## 戦争から学んだこと

弘前市立第三天成小学校

藤田亜望

ぼくは、『ななしの「んべさん』』という本を読みました。それは今から七十五年前、七月九日、大阪さかいの大空しゆうの話です。

主人公のもも子には、足にしそうがいがあります。それは、「のうせいまひ」という、生まれつき頭の中で思っていることが、手や足にうまく伝わらない病気です。それでも、もも子は、みんなで学校で勉強や友だちを作りたいと思つていました。

しかし、戦争のあつた時代は、「歩けない子は学校へ行つてはいけない」という考えがありました。もも子は、どんなに悲しくて、みじめに思つたでしよう。

もも子には、戦争に行つたお父さん、おなかに赤ちゃんのいるお母さんがあります。

そこへある日、親せきのまもるとまさるの双子の兄弟が引っこしてきました。まもるとまさるは、いたずらっ子ですが、学校に行けないもも子とは、仲良しでした。まもるとまさる

は、もも子に手作りの人形をあげました。もも子はその人形に「ななしの「んべさん」と名づけ、戦争で亡くなつたお父さんを思つて大切にしていました。

ある日の真夜中、しそういだんがもも子たちをおそいました。おなかの大きいお母さんは、もも子をうば車に乗せて、必死にげました。しかし、周りは火の海でお母さんは亡くなつてしましました。

もも子は、お母さんとはぐれてしましましたが、まもるとまさるに命を救つてもらいました。大事にしていたななしの「んべさん」もいつしよです。

この大空しゆうで大阪のさかいの町では、亡くなつた人は千三百九十四人、けが人は、千五百七十四人でした。だれにも探してもらえず、身元の分からぬ「ななしの「んべさん」」もたくさんいたそうです。

ぼくは、戦争を知りません。ぼくのおばあちゃんもおかさんも戦争を知りません。しかし、ぼくはこの本を読んで、

二つの大切なことを学びました。

一つは、しようがいがあつても平等にしていく世の中です。人とちがうこと、できないことはいけないことではあります。しかし、あつても家族からあいされて、人は一生けん命生きています。戦争の時代も、今の時代も、決してさ別はないつてはいけません。

二つ目は、命の大切さです。戦争は、「人が人を殺す」おそろしいことです。つみのないたくさん人の命がうばわれるとは、とても悲しいことです。だから戦争は、決してあつてはいけません。

ぼくはこの本を読んで知った「戦争のおそろしさ」、「命の大切さ」を大人になつてもわすれません。